

愛隣館研修センターニュース

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町 151 Tel: 075-621-3349 Fax: 075-621-1579

E-mail: airinday@sunny.ecn.ne.jp http://www.airinkan.net 振替: 01020-5-39321

編集発行所: 社会福祉法人イエス団 愛隣館研修センター 発行責任者: 平田 義

109号

「ピンチをチャンスに！」

『コロナ』によって気づかされた、大切にしなければならないこと

平田義 (愛隣館館長)

新型コロナウイルスの感染拡大によって、私たちの生活が一変させられました。今号では、それぞれの立場で、この状況の中で気づかされた大切な視点を寄稿していただきました。ご一読いただき、完全収束には程遠い状況下で、ピンチをチャンスに変えて、したたかに生き抜いていく一助になればと願っております。

今年の2月頃から新型コロナウイルスの感染拡大が起こり、様々な影響が出始めました。2月27日には、全国の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校に対して3月2日より春休みまで臨時休校が要請されました。学校から子どもたちの姿が消えました。4月7日には7都府県に対して緊急事態宣言が発出され、16日にはそれが全国に広がりました。街から人の姿が消えていきました。3密を避けることから、人と出会うことや、触れ合うこと、機会がなくなり、家に留まることが最善であるとされました。新型コロナウイルスの感染拡大は私たちの世界を一変させました。

そして、コロナ禍と呼ばれる言葉が生み出され、様々な問題が私たちの社会を苦しめています。ただ、それらの問題の多くは、コロナによって生み出されたものというより、社会の中に元から存在していた矛盾、つまり、いわれのない差別や分断がコロナによって露呈されたともいえるのではないのでしょうか。こう書きだすと、これらの問題の一つずつ明らかにしながら、話を展開していきたくなるのですが、今回は、それらの問題をポジティブに受け止めて、プラス指向で話を進めていくことにします。

これまで当たり前前に社会で生活できていたことに対して、様々な制約を受けることになり、多くの方が日常生活の中で不便を感じずにはおれない状況に陥りました。この状況をチャンスだと言えば不謹慎にあたるのでしょうか。

障がいのある方々は、日々の生活の中で様々な社会の障壁があり、不便さを強いられています。そのような方が存在することを、自らが大変な状況に追い込まれることによって、身近に感じることで、我がごとを感じることで、できるチャンスではないかと思うのです。自分たちが生きづらさを感じる中で、社会の中

でコロナの感染拡大とは関係なく、生きづらさを抱えざるを得ない方々がいることに気づいていければ、お互いの痛みをシェアしていくことのできる社会に近づいていけるのではないかと期待しています。

その文脈の中で、「濃厚接触を避ける」という生活様式を守ることが求められていることに対して、この社会には「濃厚に触れられること」が無くなれば、生きていけない人たちがいることにも気づいてもらいたい。一人で食えることができない方、一人で入浴できない方、一人で排泄できない方、一人で移動できない方々にとれば、「濃厚に触れられなければ」生活が成り立ちません。このコロナ禍の状況下でも、接触しての支援が必要な方は、変わらず支援が必要なことを見落とさないで欲しいと思います。

新型コロナウイルスの感染拡大により、安全のために人との接触を避けるように強いられ、人と触れ合う機会が激減していく中で、多くの方が感じたことは、人との繋がりが大切であるということではなかったでしょうか。直接出会うことがなかったとしても、WEBなどを通して、繋がっていることを確認し合う方策を見出してきていたように思います。その人との繋がりの輪の中に、いろんな多様性をもつ人たちがいることに気づくチャンスがあると感じています。

新しい生活スタイルが推奨されていますが、生きづらさを感じさせられる中で、コロナ以前からも、社会の中で生きづらさを感じながら生きてこられた方々を排除するのではなく、共に連帯し生きていく社会を目指していく、新しいインクルーシブな社会の実現に向かっていくことができると、ピンチをチャンスに変えていきたいものです。

■ 感染症と先住民族

黒多みなみ (向島伝道所牧師)

1990年から10年間北海道で牧師をしていました。その間、わけでも印象深かったのはアイヌ民族とのかかわりです。そのころは、「旧土人保護法」という名称からしてひどい法律が現行法としてあり、平取町に建設された二風谷ダムがアイヌ民族の聖地を水没させることから、その建設の差止を求める裁判が提起され、裁判を何度も傍聴する機会があたえられました。1997年札幌地裁はダム建設を認めるものの、国の機関としてはじめてアイヌ民族を先住民族としてみとめる画期的な判決をくだしました。公判後原告の萱野茂さんとビールで祝杯をあげたことを昨日のこのように覚えています。

その後も、いくつかの裁判にかかわり、傍聴を通して、アイヌ民族への理解を深めることができました。なかでも今でも気になっている裁判がありました。ある高名なアイヌ文化研究者が出版した資料集のなかで、戦前の警察が調査したアイヌ集落の報告書を、原文のまま掲載した事件のことです。調査は詳細をきわめ、家族構成から、生活程度、病歴まで記載されたものでした。自分の祖父母や総祖父母が、「遺伝性梅毒」とか「結核」であったという記録が出版されたらどうでしょう。けれどもこの裁判には、個人的な事情もあり十分にかかわることができませんでした。

梅毒はコロンブスが新大陸を「発見」(1492年)して以降、ヨーロッパにもたらされたとされています。1532年スペインの侵略者ピサロがインカ帝国皇帝アタワルパと衝突します。インカ側が8万人にたいしてピサロ側は168人であったとされています。戦闘はピサロ側の圧倒的な勝利におわり、それ以降、インカ帝国は滅亡の道をたどります。ピサロ側が銃という文明の利器にたよったから、インカ側は素手で戦ったからだと言われてきましたが、今日ではヨーロッパの侵略者もたらした感染症、天然痘、はしか、発疹チフスの蔓延が原因であり、勝敗は戦闘のまえにきまっていたとされています。ヨーロッパ側がユーラシア大陸でインドや中国とつながっているのにたいし、インカ側は太平洋と大西洋にかこまれ、孤立した文明であったため、

様々な感染症からまもられてきたものの、そのために免疫が獲得されず、結果として感染症には弱い社会になってしまったということです。

およそ1万年前メソポタミアで農業ははじめられました。それ以降人類は集落をつくり、都市を形成してきました。人から人へうつって、蔓延する感染症もそうした人間の集住とともに、人間社会に入りこんでくるようになりました。それでは、狩猟採集をしていた時代はどうだったのか? 現在のよう蔓延はみられなかったというのです。移動しながら狩猟採集の生活をしてきた時代の集団は、食物の蓄積ができないため、小規模な血縁集団にならざるをえない、それもあまり近接して生活すると狩猟採集が困難になるため、ちらばって生活していた、そうした社会では感染症は発生しないというのです。わたしたちは狩猟採集生活という腹をすかせて、歩き回り、病気にも悩まされつづけるといったイメージでとらえがちですが、生活習慣病の糖尿病や高血圧とは無縁の、以外に健康的な生活であったのかもしれない。

イギリスで産業革命がおこり、ヨーロッパはアフリカを植民地にしていきます。そこで問題になったのはマラリアでした。19世紀にはいりアフリカに旅行する白人の、初期には探検家や宣教師、のちには植民者や軍人が多く犠牲になりました。アフリカが長く「暗黒大陸」と呼ばれた所以です。免疫をもつアフリカ人にとってはなんら暗黒ではなかったのですが……。転換点となったのはマラリアの特効薬キニーネの発見です。その後こうした植民地経営のための医療は熱帯医学とか、植民地医療とよばれマラリアや黄熱病などの治療に大いに貢献することとなります。スエズ運河の完成も黄熱病の治療法の発展と無関係ではありませんでした。

こうして見てくると、感染症は文明と関係しながらありつづけてきたことがわかります。今回の新型コロナウイルスの蔓延も、地球環境と人間のかかわり、発達した交通手段による世界のグローバル化と関連したものです。わたしたちが文明を続けていく以上、撲滅をめざすのではなく、どこかで折り合いをつけるしかないのかもしれない。

新型コロナウイルスで、悲しいニュースが続いていますが、『今日は悲しくても明日は楽しくなる』そう信じて乗り越えていきたいと思えます。(藤田有紀)

生だそ明今日未人未
きてからう日は日は来間来
てい信はははははは
らら信はははははは
れるるじてははははは
ののるははははは
のですのるのす
すすすすすすすす

柏木正行さんの魂に触れる

ごあんない

「平和」をつくる集会
8月6日(木)8:00~8:30
場所:中央公園
被爆70オギ12世前
 原爆犠牲者への追悼を祈り、平和への思いをつないでいく集会です。どうぞお越しください。

□支援のかたち

愛隣デイサービスセンター
榎井一步

新型コロナウイルス(というワード)をテレビで目にし、よそゆきな感覚で報道を見ていたのも束の間、連日増加していく感染者の数やうねりをあげて変わっていく社会にのみこまれる中、気づけば愛隣デイ、デイケアサラムも今後の対策を早急に考えなければならぬ現実と直面していました。

世間で自粛が求められる中、実際デイサービスに通えないことにより困る方たちもたくさんおられました。このような状況だからこそ必要な方たちに支援を届けていきたいという思いで感染対策に取り組みながら活動しています。とはいっても感染対策についてまだまだ至らない部分も多々あり、様々なご意見をいただきながら取り組んでいるのが現状です。

感染の不安からデイの利用を自粛されている利用者さんも数名おられました。そういった方たちに対しては電話で体調の確認であったり、近況をお伺いしたりしていました。話を重ねていくうちにコロナに対する不安であったり、自粛で精神的にも肉体的にも疲弊されている状況が身にしみて伝わりました。自宅で過ごされている利用者さんに対して、離れた状況でわたしたちがどのような支援が届けられるのかが課題でした。

相談を重ねるうちに自粛中のTさんとテレビ電話で話せる機会をいただきました。10分程の短い時間ではありましたが、デイにいる人たちとお話したり、みんなでTさんが好きなうたを歌ったり、小さな携帯電話の画面越しにみんながTさんに思いを伝えながら、それに対してTさんも笑顔で応えてくれたり。「支援って直接的な支援だけではないや」「離れていてもいろんな形でつながっていける形があるんやな。」そんなことを感じさせられた一場面でした。

自粛されている方たちだけでなく自宅で療養されていたり、入院されていたりする方もおられます。離れていても元気やパワーを伝えたり、もらえたり。そういった新しい形の支援や取り組みをもっと大事にしていけないといけないうちにコロナをきっかけに学んでいます。

□新しい生活様式に

障がい児・者ホームヘルプ事業「ゆうりん」
横山利明

ホームヘルプ事業『ゆうりん』では、障がいのある方への生活支援を行っています。在宅へのヘルパー派遣のみならず、外出の支援も行っています。

コロナ禍、歌うことも、踊ることも制約され、生活にストレスが溜まっているこの頃。

そのストレス発散の矛先が、他人や自分を傷つけることに向いているのでは？とニュース

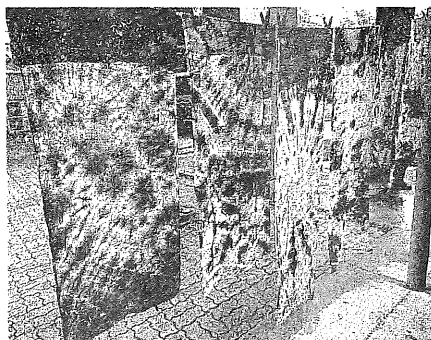
などを見ながら感じています。私たちのすぐそばの人達にもそんな危機的状況が迫っていないか？！何か今できることがないか？！と頭を悩ませているところです。手を洗う、マスクをする、密を避ける。これが新しい生活様式だなんて言われて、それだけで、これからのゆうりん利用者の生活を支えきれぬのだろうか。それだけじゃない新しい生活様式なんてものを、自分たちで考えて創ってゆきたい。そこで、制約の多い中ではありますが、むかちゅうセンターでの活動に小さな野心を持ったゆうりんがありました。

それでは、ゆうりんの最近のむかちゅうセンター活動を紹介します。

まず、手始めに『食べられるお庭』にチャレンジ。利用者にとんな野菜が食べたいか聞き、苗を植え、種を蒔きました。汚れるのが苦手な人はなんとも上手にスコップを使ってみたり、種を蒔いて土をかぶせるつもりが空気いっぱい土をかき混ぜる人がいたり、雨の日もお庭に水やりを欠かさずする人がいたり。それでも順調に育つ野菜たち。たっぷりの愛を受けた野菜たちの収穫が今から楽しみです。(おすすめはスイカ♪)

↓絞り染めあざやか！

作ることが楽しくなったゆうりんは、次に絞り染めをすることにしました。お気に入りだけど、色あせたTシャツや手ぬぐいを絞り思い思いの色を塗りたくる。「赤はイチゴやし多めに〜」「黄色はカレーやな〜」「青は食べもんならまずそうだし、夏の青空で！」黄色と青が混ざったら、緑になって「これ、スイカやん(笑)」そんな事を言いながら、絞りをほどこいてみると、鮮やかなオンリーワンのTシャツや手ぬぐいの出来上がり。色とりどりでオンリーワンがところ狭しと干しならべられ、これからは新しい生活だ！！と宣言するかのよう風にたなびいていました。



おっと、早くも、夏野菜たちが育ってきたので、週末はピザ窯を作って、むかちゅうセンターの草刈りで出た雑木を燃料に自家製ピザでも焼いてみようかと。

自分たちの生活を見直してみると、こんなにも毎日がワクワクするものだとは思っていませんでした。それはきっと、消費するだけでなく、生産し循環すること。モノだけでなく心も再生産され、循環が生まれる。淀む心に心地よい風が吹き込むのではないかと思います。この先どんな生活が待ち受けていようとも、手持ちの力を活かして、生きることには意欲を持って、笑顔であり続けたいと思うばかりです。

あいりんコラム 「コロナ禍に惑わされることなく」

京都市南部障がい者地域生活支援センター「あいりん」太田正人

毎朝、玄関を出る前の心の中での確認。(携帯忘れてないな)に、(マスク持ったかな)を意識してしまう自分がある。コロナ禍の中で、「新しい生活様式」やら「ソーシャルディスタンス」のような新しい言葉がもてはやされ、何の疑いもなくそれを受け入れていく。受け入れるだけでは止まらず、それ以上のことを自らが率先してやっつけていこうとする。それがむしろ「善」だというような空気が出てくることに不安を感じる。その最もたるものが、緊急事態宣言が出された時の自粛警察(コロナ自警団)である。営業を続けている店が攻撃対象になり、特にパチンコ店への攻撃は、政府やマスコミも含めて一丸となっておこなわれた。求められていたのは、あくまでも営業自粛の要請ではなかったのか?

「自粛」とは、自分の言動に対する反省に基づき、自分から進んで慎むこと(新明解国語辞典より)である。また、同じく「要請」とは、必要だからそうして欲しい願いを求めること(同)である。しかし、現状に即して言うなら、営業停止の強制ではなかったか。

かくいう僕自身も「パチンコ店、何でもまだ(営業)してんの?」と当初は思ってしまった。しかしながら、お店のそれぞれの個別の細かい事情を聞くにつれて、それが自分の内側から出てきた感情ではなく、社会に漂っていたものを拾い集めたにすぎないのではないかと思った。気がつけば、いつの間にか自分自身が付度し、自粛警察予備隊に入隊していたのだ。

ここで歴史を振り返るなら、1923年9月1日の関東大震災時のことを忘れてはならない。「朝鮮人が井戸に毒を投げ込んだ」というデマが広がり、市民らで組織された自警団により、朝鮮人や中国人や被差別部落の人たちが、一方的に虐殺された。これは決して過去の話ではない。2016年の熊本地震においても、同様のデマがSNSで拡散されたのだ。我々は、一体歴史から何を学んだのだろうか。いや、学ばなければならないのか。

コロナ禍のような大きな不安や今後の見通しが見えないような状況が起こった時、誰もがそれに関する情報を、その原因を求めようとする。少しでもそこから逃れたいために。自ら考えるのではなく、同時に流されるデマや噂でさえも取り込んでしまう。

先日、あるお母さんがケースの会議での発言。「うちの子はマスクがつけられない。自分で体温調節することが難しいいうえに、感覚過敏があって。だからずっと本当に今も電車に乗れないし外出もしていない。やっぱり周囲の目が怖いから。とっっても電車が好きな子なのに」

「みんなちがって、みんないい」、「一人一人を大切に」。誰もが大事にしたいと思う言葉だと本当に思う。ただ、そこで言う「みんな」や「一人一人」には顔がない。だから声も聞こえない。大切なのは、その人の生の声に、思いに、まず耳を傾けること。そうすることで、同じ景色が並んで見える、それが出発点である。その人だけの物語を大切にできるように、これからもありたいと思う。

<新愛隣館建設のための募金のお願い> ~インクルーシブ社会の実現を!

2020年4月より、新愛隣館の建築工事が始まりました。建築費用は、自己資金と借入金のみで賄う予定です。つきましては、皆さまからのお支えをお願いしたいと思います。これまででも、多くのお支えをいただいておりますが、重ね重ねのお願いで恐縮ですが、何卒よろしくお願ひいたします。

支出	金額	収入	金額
総工費	12億	自己資金	7.2億
		借入金	4.5億
合計	12億	合計	11.7億

<寄付金振込先> 寄付控除が受けられます
郵便振替：01020-5-39321
口座名義：社会福祉法人イエス団
愛隣館研修センター
*募金目標額：3千万円

★お知らせ★
▽愛隣館研修センターは、むかちゅうセンターにて活動中です!
★編集後記★
▼100号の「意見」感想お聴かせ下さい。(c)
▼今年の6月23日を京都で迎えた▽30年前に平和行進に参加してからは毎年沖繩で迎えていたのが▽沖繩戦後75年が経過した▽沖繩戦で犠牲となった▽平和を希求する沖繩のこころに触れることのできる大切な日だ▽しかしそのこころは日本政府には響かない▽辺野古新基地建設に反対する声が過半数を超えているにも関わらず基地建設は強行されている▽イー・ジスアショアは経費と年数を勘案し中止された▽辺野古はそれ以上かかるが続行されている▽軟弱地盤の問題も棚上げだ▽アウト!(一)